

## 1-03 ロウイングの魅力，開始の条件

## 1 ロウイングは視覚障害があっても漕げる

●視覚に障害があると、自動車や自転車など陸上の乗り物を自分で動かす体験はなかなか難しいでしょう。 タンデムの自転車もありますが、陸上での衝突や転倒の危険は問題です。 ましてや、水上のボートは不可能というのがこれまでの常識でした。「まわりをよく見て安全を確保しなければならない。 前の漕手をよく見て正確に合わせなければならない」と。「ボートをするには、視力が不可欠」というのが常識でした。

●しかし、発想を変えれば、ロウイングは視覚に障害があっても楽しめる、競技できる、また少しの工夫と支援で、一人でシングルスカルさえ動かせるスポーツにすることができます。 ぜひボートにチャレンジしてみてください。

## 2 見えなければ漕げない？

●いくつかの工夫や発想の転換が必要ですが、クルーボートの漕手に、視覚は絶対必要不可欠ではありません。 漕ぐ動作や合わせることに、「視覚は、大切だけれど、不可欠ではない」のです。 整調であれば、合わせることから開放されます。 最終的にクルーローイングは、健常者と視覚障害者の間に、区別が必要のない、十分互角に競えるスポーツです。

●舵手、シングルスカル、舵手なし艇のパウなどは、支援が必要です。しかし必ずしも不可能ではありません。 直線の競漕であれば、少しの配慮と工夫で、舵手やシングルスカルでも、視覚障害者と健常者を区別する必要などないスポーツに進化させることができる、と確信しています。 その時代を開拓していきましょう。

## 3 いくつかの工夫、配慮すべきこと

●視覚障害を持ってボートをする場合の、いくつかの規定、条件、工夫を抜粋しておきます。

- アダプティブ種目では、MXLTA4+に2名の視覚障害者が乗らなければなりません。
- クルーボートでは、整調を漕ぐだけでなく、他のポジションでも、ユニフォーミティを獲得できる可能性が充分にあります。 漕手に関しては、視覚障害は、(たとえ全盲であっても)不可能用件とは限らず、健常者と区別なく渡り合える可能性が充分にあります。
- 舵手については支援なく視覚障害をもって「練習に」従事することはできないでしょう。ただし、支援と直線コースでの競漕については、従事できる可能性があります。
- 落水、転覆に備えライフジャケットの着用を強く推奨します。
- 転覆時に、ボートの場所を確認し、接近できる措置が必要と思われれます。
- 転覆防止のために、安定した船型の艇を使い、リガーにフロートをつけることができます。
- シングルスカルを漕ぐ場合は、前方をガイド艇が誘導し、本人は静かに聴きながら漕ぐことで対応できます。
- ブレードの向きが握っただけで分かるように、グリップの形状を工夫することが必要です。
- リギングに補助が必要です。 またブレード深さの感触を養成することに、大きな努力が払われることになるでしょう。